

黙示録：七つの教会

ジェイコブ・プラッシュ著

● 日の下に新しいものは一つもない

この本では黙示録でヨハネが記録したアジアの七教会へのイエス・キリストの手紙を通して、教会史を分析していきます。

七つの教会の中の誤った教えと習慣は私たちがそれを想像する以前から発生しています。過去から学ばない限り、同じ間違いが繰り返されることは確かです。事実、教師としてソロモン王はこう書き記しました。

『昔あったものは、これからもあり、
昔起こったことは、これからも起こる。』

日の下には新しいものは一つもない。

「これを見よ。これは新しい」と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか先の時代に、すでにあったものだ。先にあったことは記憶に残っていない。

これから後に起こることも、

それから後の時代の人々には記憶されないであろう。』（伝道者の書 1 章 9 節－11 節）

● 七つの教会の名前が持つ重要性

七つの教会のギリシア語の名称はそれぞれ意味を持っています。またそれぞれが象徴する教会と時代に多少の重複があるものの、この七つの教会は特定の時代を象徴しています。教会が似たような問題を持っているのはどの時代であれ同じことですが、この七つの教会の特徴は多かれ少なかれ私たちの教会にも当てはまるものです。

エペソ

『継続しない、短命な』

第一世紀の使徒的教会を象徴

スミルナ

『埋葬のために油注がれる』、『苦み』、『没薬』、『喪に服す』

第二世紀から第三世紀のニケア公会議以前の教会を象徴

ペルガモ

『離婚した』『霊的偶像礼拝』、また『塔』『この世の力』

コンスタンティヌス帝から宗教改革まで、四世紀から 16 世紀の教会を象徴。『神聖ローマ帝国』の絶頂期

テアテラ

『継続するいけにえ』

11 世紀から 16 世紀までの暗黒時代真っただ中の時代を象徴

サルデス

『不完全』または『肉による』『更新』

16 世紀から始まる一般的に宗教改革と呼ばれる時代の教会を象徴

フィラデルフィア

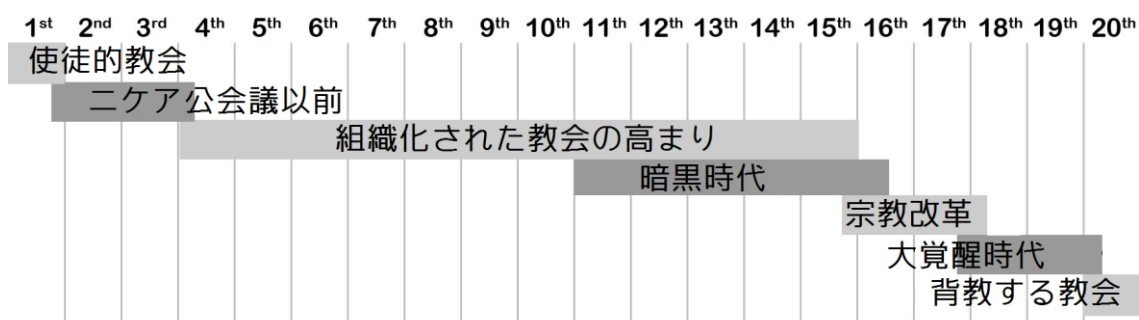
『兄弟愛』

福音派の宣教運動、また 18 世紀からの大覚醒時代を象徴

ラオデキヤ

『人々の意見』

第二次世界大戦以降に始まったと思われる、今日へと続くイエスの再臨前の、終わりの時代の教会を象徴



● 実際の教会への適用

『そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。』
(黙示録 1 章 19 節)

この箇所から『(過去) 見た事』、また『今ある事』、そして『後に起こる事』が書かれてあることが分かります。

この七つの教会は第一世紀に実在した教会であり(過去見た事)、歴史上のどの時代にも存在している教会の大まかな七つのタイプを象徴し(今ある事)、教会史の中で重複する七つの時代を示しています(後に起こる事)。このアジアの七つの教会への手紙は主な 4 つの方法で適用することができます

1. 紀元第一世紀終盤に文字通り、歴史的に存在した教会
2. 歴史を通していつの時代にも存在する教会の七つの型
3. 終わりの時代に存在する七つの教会の種類
4. 教会史の七つの期間にもよく関連

● ミドラッシュによる解釈

ミドラッシュとは『探求すること』を意味する言葉です。ユダヤ人は、西洋思考と全く違った聖書の読み方をしました。単語の意味と文脈は重要ですが、ユダヤ的なアプローチはその意味を説明するために一貫性を持ったテーマや、パターンを必要とします。

初代教会における一般的な聖書解釈、また詳細にいうと解釈法として使徒たちが用いた新約聖書におけるミドラッシュというテーマは、この本の目的を越えるものです。そのため内容に関連性のあることだけを簡潔に説明したいと思います。聖書についてのこの重要な側面を包括的に説明するならば、それだけを主とした本が必要となります。17 世紀までさかのぼると、聖書的な福音派神学者たちは教会が新約聖書を生み出した初期ユダヤ的解釈に戻ることに必要性を論じていました。

初期ユダヤ的解釈への回帰はジョン・ロビンソン (*John Robinson*) などの清教徒の中に見られた共通の特徴であり、後には初期ディスペンセーション主義の注解者ら、特に 19 世紀から 20 世紀初頭のプリマス・ブラザレンの中で関心の度合いが高まりました。第一世紀にはミドラッシュという題材への興味が再び高まり、新約聖書中で採用されているミドラッシュ的手法は、キリストをメシアとして受け入れるユダヤ人が急激に増えている結果、現代再び姿を現しています。これは聖ペテロが教会の『リーザ (*reza*)』つまり『ヘブライ的ルーツ』と呼んだもので、ローマ 11 章に定義されているものを現代の人々が求めるようになっているのです。

これらメシアニック神学と呼ばれるもの大半が焦点を当てている事柄は、イエスと使徒

たちの本来のキリスト教が開花した第二神殿期ユダヤ教の『シツ・イム・レベン』を再発見することです。このメシアニック神学の先駆けは疑いもなくアルフレッド・エダーシェイム (*Alfred Edersheim*) であり、彼の後にデイビッド・バロン (*David Baron*)、ラクミエル・フライランド (*Rachmiel Fryland*)、また故ルイス・ゴールドバーグ博士 (*Dr. Louis Goldberg*) が続きました。今日メシアニック神学はダラス神学校卒業のアーノルド・フルクテンバウム博士 (*Dr. Arnold Fruchtenbaum*) や、ムーディー神学校のマイケル・リデルニック博士 (*Michael Rydelnik*)、また他のディスペンセーション主義の学者たちによって続けられ、改革主義の学者たちの幾人かもそれに参加しています。

シツ・イム・レベンとは聖書箇所への文化的・歴史的な背景に関して使われる学術用語です。福音は歴史的、また文化的に第二神殿期のユダヤ教（イエスが福音書で警告したラビ的な教理の伝統をほのめかしているのでは決してありませんが）のシツ・イム・レベンから生まれました。シツ・イム・レベンとはキリスト教が、第二神殿期後期、第一世紀のユダヤ教の社会的・文化的背景から生じた文字通りの歴史的事実であり、これがキリスト教のシツ・イム・レベンとなっています。もちろん私たちは聖書的ユダヤ教とラビ的ユダヤ教の間に区別を付けなくてはなりません。（後にタルムード的ユダヤ教と呼ばれる）ラビ的ユダヤ教はこれまでずっと悪化し、墮落している状況にあります。神が与えたトーラーのユダヤ教——『モーセの律法』——はそうではありません。イエスの時代にはその両者が混在していました。神殿ではトーラーの中で命じられたレビ人によるささげ物などが行われていましたが、すでにその時点で彼らは口伝律法により墮落していました。イエスは一度も聖書的な律法に反対して教えませんでした。律法を非聖書的に改ざんしたサンヘドリンなどにだけ反対していました。（他の箇所はありますが）マタイ 15 章ではイエスは両者の区別を付けています。それゆえ私たちも区別すべきです。

また大半のメシアニック神学は同様にユダヤ教研究に熟知している非ユダヤ人たちによっても推し進められています。その中心がどちらもエルサレムに位置する、カスパリセンター (*Caspari Library*) と聖地研究所 (*Holy Land Institute*) です。長らくこのエリアの神学の根底にあったのはユダヤ人伝道に中心を置いたメシアニック擁護論でした。著名なフィンランドの学者リスト・サンターラ博士 (*Dr. Risto Santala*) は、ラビ的な情報源に基づいてキリストのメシア性を擁護する高度なメシアニック擁護論の分野でおそらく最前線に立つ人物です。注目する必要はありませんが、不思議と新約聖書のユダヤ的背景を探ろうとする未信のユダヤ人学者や、学識のあるラビたちによるラビ的神学の急激な高まりが現在まで起こっています。

英国国教会の学者、故 J・A・T・ロビンソン (*J. A. T. Robinson*) は、福音書が大部分にわたって驚くほど第一世紀のユダヤ教に詳しいという理由で（また第一世紀の鍵となる福

音書断片と、非常に重要な『ティーセン本文』の発見も伴い) イエスの時代数世紀後に福音書が異邦人教会によって記されたというリベラル高等批評の主張を退けました。それによりラビたちによる興味が独自に沸き起こりました。アイビー・リーグの学者ジェイコブ・ニューズナー (*Jacob Neusner*) は福音書のことを、アポクリファ (外典) と初期ミドラシームの間の極めて重要な古代ユダヤ的書物だと分類しています。オックスフォード大学の学者ゲゼル・ベルメス (*Gezer Vermes*) とラビ兼学者であるピンカス・ラピード (*Pinchas Lapide*)、またラビ兼学者であった故ダビッド・フルッサル (*David Flusser*)、またラビに関するイギリスの学者ハイム・マカビー (*Hayim Macabee*) らはとりわけ、福音書物語のユダヤ的起源を支持しています。

しかしながら、これら新約聖書とキリスト教信仰のユダヤ的起源に関する新たな学問と興味の高まりは、これまで肯定的なものではありませんでした。共観福音書研究エルサレム学派は明確な写本証拠無しに、福音書が本来ヘブライ語で書かれたと憶測しています。ですがマタイがヘブライ語で書かれたという根拠はパピウス (*Papias* 紀元 70 年以前-150) とヘゲシッポス (*Hegesippus* 紀元 110-180) の教父的言及ひとつしかありません。一方、現存する最古のシリア語本文がギリシア語から訳されたという事実があるため、彼らの主張に実際の証拠は存在しません。

加えて、よく知られているメシアニック運動の大半はユダヤ教的な律法主義に墮落しており、非ユダヤ人をラビ的な習慣やトーラー遵守の下に置きさえし、ほとんどの場合正当なユダヤ教学問に通じていません。しかしながらキリスト教信仰のヘブライ的性質、またユダヤ人に宛てられた手紙、つまりヤコブへの手紙、ヘブル人への手紙、ユダの手紙、ペテロの手紙など特定の書簡、新約聖書中の物語のユダヤ的性質の再発見は今一度流行しています。このような事実は、モイゼス・シルバ (*Moisés Silva*) などの良く知られた学者らにより支持されている聖書解釈の再評価とよく関連しています。これには多くの新約聖書学者が不可避だと考えている、ミドラッシュ的解釈への注目も含まれています。

新約聖書記者が用いた (ミドラッシュを含む) ユダヤ的解釈の良い入門書は、保守的福音派 (などの) 学者が作った大量の著作物の中にあります。それは R・N・ロングネッカー (*R. N. Longenecker*) やデイビッド・ドーブ (*David Daube*)、T・S・ドハーティ (*T. S. Doherty*)、ジョン・ライトフット (*John Lightfoot*) などです。古典的な学問的研究はビルダーベック (*Bilderbeck*) とシュトラウス (*Strauss*) の広範囲にわたる研究の中に見出されます。もちろんこの非常に広い範囲をカバーする神学は本書の範囲外にあるので、それらの著書の引用を限定しておきます。

私たちにとって間違った聖書解釈法、非聖書的な読み方を避けることは必要不可欠です。

西洋の「本文が明確な意味を成していたなら、他の意味を探してはならない」という教えは大半の研究を導いてきたルールのひとつです。注目すべきことにこの教えは聖書中に見出すことはできません。イエスが空腹な者に食べ物を与えなさいと言われたとき、それはソマリアやスーダンのような所に食べ物を与えることを確かに意味していましたが、同時に飢え渴く者、聞く耳のある者にいのちのパンである福音を与えることも意味していました。それは『または／どちらか』と限定する解釈ではなく、複数の事柄を意味するのであり、**どちらの解釈も正しい**のです。

ラビたちは聖書箇所に対して七十の解釈があると説きました。これは文字通りの『七十』ではなく、『多くの』という意味です。イエスはそのラビたちに賛同します。イエスは複数回『預言者ヨナのしるし』について語られ、ある箇所ではヨナのしるしは、人の子が三日三晩墓の中にいるということだと言われました（マタイ 12 章 40 節）。しかしまた別の箇所では、ニネベの人々は悔い改めたが、ユダヤ人は悔い改めなかったことだと説明されました（ルカ 11 章 29 節－32 節）。

そうすると出エジプトにおいて、ユダヤ人がこの世の富を持ち、パロから離れ、紅海を渡り解放されたことは、イエシュア（イエス）により弟子たちがこの世から富をもって脱出し、悪魔から離れ、御名による水のバプテスマを受け、天の御国に上ることのパターンであり、前触れなのです。同じように、モーセが山に登り、民と契約を結び、血を振りかけた時、それはイエシュアがエルサレムに上り、ご自身の血をもって新しい契約をもたらすことのパターンであったのです。

ミドラッシュのテーマはヨシュア記と黙示録を関連付けます。エリコでは七日間静けさがあり、七日目に七つのラッパが七回鳴らされました。最後のラッパが吹き鳴らされると、大きな叫びがあり、この世の王国（エリコとその城壁）は倒れ、神の民は神の裁きをもって攻めました（ここで見過ごしてはいけないのは、カナン人が非常に邪悪な民であり、ソドム・ゴモラと同じようなものだったことです。そのため少数の正しい人を除いて彼らは神の裁きを受けました）。黙示録でも同じことが見出せます。七つの封印の中に七つのラッパがあり、七つの災害があります。そして七の集合が、七番目から出てきます。最後の第七のラッパが吹き鳴らされると大きな声があり、この世の国は王の王、主の主の到来の前に倒れ、天からの群衆が主に続き、アルマゲドンに行き着きます。その後私たちに神とキリストの新しい王国が地上で始まります。

創世記とヨハネの福音書は同じように一致します。どちらも「はじめに」という言葉で文が始まります。旧約新約間の時代（紀元前 400 年－0 年）からユダヤ教では長らくいちじくの木がいのちの木の象徴であると教えられてきました。イエスがナタナエルをいちじくの

木の下で見たと言われた時（ヨハネ 1 章 48 節）、それはナタナエルがその下にいるのを幻で見た文字通りのいちじくの木を表しているだけではありません。ユダヤ的な聖書解釈からイエスはナタナエルを本当の始まり、この世の創造の時から彼を見ていたと語っていたことを理解する必要があります。

イエスによればアベルが最初の殉教者であり、彼の血は叫んでいます（ルカ 11 章 51 節）。黙示録でも殉教者たちが叫んでいます（黙示 6 章 9 節－10 節）。始まりは終わりについて教えています。神は黙示録、ヨハネの福音書、創世記に靈感を与えられましたが、それらは互いに繰り返し、並行関係にあります。**新しい創造**について理解するには、**最初の創造**の記事を調べてください。

旧約聖書本来のヘブライ語本文に記録されたミドラッシュ（2 歴代誌 13 章 22 節）は、新約聖書で用いられているように、文脈と並行箇所を原則を決して破らず、最初に見出される文字通りの直接的な意味（ペシェット）に依存します。そのペシェットが深い意味（ペシエル）を探す本質となります。

ミドラッシュには守るべき最も重要なルールがひとつあります。**決して、どんな場合でも『象徴』や例えを教理の基礎としてはいけません。**聖書は一度もそれを行っていません。聖書が行っていること、それゆえ信者がすべきことは、例えをもって教理を**説明**することです。

例えば過越の食事を考えてみましょう。聖書は贖いについて語る際、過越の子羊やその象徴を基礎にはしていません。一方、聖書は象徴を用いて教理を例えを持って示し、すべて信じる人の代わりにイエスがいかに過越の子羊のように死なれたかを説明しています。それは過越の子羊の血がモーセを信じるユダヤ人全員を解放した事と同じです。

ダニエル書と黙示録の次の箇所も考えましょう。

『ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を**封じておけ**。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。』（ダニエル 12 章 4 節）

『また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを**封じてはいけない**。時が近づいているからである。』（黙示録 22 章 10 節）

聖霊はこれらの事柄を暗号化しました。そして終わりの日に忠実な者たちのために暗号を解かれます。その暗号解読作業を行うためには神がもうけられた本来の文脈、ユダヤ的

な思考方法によって聖書を読み直す必要があります。

創世記もまた黙示録と一致します。神は始めから終わりを告げていました（イザヤ 46 章 10 節）。人の神との関係はエデンの園において始まりましたが、ゲツセマネの園、また十字架と園の墓に関して続きました。十字架の三日後にマグダラのマリアは復活したイエスと会い、イエスを園の管理人だと思いました。彼女は完全に間違っていたわけではありませんでした——創世記 2 章を思い出すと、神は園で働かせるためにアダムをそこに置いたとあります（創世記 2 章 8 節）。ある意味でイエスは第二のアダムでしたが、イエスは天に挙げられました。

すべての事柄はイエスが戻って来られる黙示録で終わります。エデンの園はいのちの水の川、いのちの木と共に復元され、また人が再び神と歩むようになります。創世記 3 章で、罪人の墮落と共にやって来た呪いは砕かれ、「もはや、のろわれるものは何もない」のです（黙示録 22 章 3 節）。もちろん来るべき世にはどんな罪もありません。聖書全体はイエスとその十字架を中心にして対称関係にあります。最初全ては非常に良く、終わりにも全てのものが非常に良いものとなるのです。

これがミドラッシュの実例——テーマやパターンです。聖書はたいていの場合、聖書自身でそのような解釈を導き出しています。

ラオデキヤを含む、黙示録の七つの教会を扱うにあたって、私たちはひとつの時代にあった文字通りの教会が、異なった時代と異なった場所にある教会をいかに比喩的に表しているかを実用的に探っていきます。これは新約聖書がミドラッシュ的に他の箇所を扱う方法を知る上で鍵となる重要な要素です。

マタイの降誕物語には 4 つの『定型導入句 (*formula citation*)』が確認できます。定型導入句とは、旧約聖書箇所がキリストに適用するため引用され、ひとつの（過去の）状況が他の状況にも当てはまると考えられるものです（その典型例がホセア 11 章 1 節です。ここでは、キリストが幼少時にエジプトから出て来たことと、出エジプトのモチーフとが重ね合わされています）。それゆえ七つの教会への記述中で、バラムの教え（民数記 31 章 16 節）のような旧約聖書箇所がペルガモの出来事にも適用されています（黙示録 2 章 14 節）。またイゼベルの時代がテアテラの教会に当てはめられ（黙示録 2 章 20 節）、同じようにダビデのモチーフもキリストに適用されています（黙示録 3 章 7 節など）。

私たちは無条件的にディスペンセーション主義を受け入れる姿勢には同意しませんが（聖書ははっきりとふたつだけディスペンセーション[区分]があり、大半のディスペンセーシ

ジョン主義者が考えるような多数の区分ではありません)、新約聖書の中で教えられている基本的なディスペンセーション主義は支持しています。また私たちは契約神学の大半の教義を退けます。それは明白な聖書的根拠を持っておらず、その多くの教義とそれに付随するものは、聖書中で具体的に教えられている真理と反対だからです。七つの教会を解釈するにあたって、私たちはそれらの枠組みに限定されることはありませんが、ディスペンセーション主義的な解釈を認めています。これは実際の七つの教会が象徴的また預言的に、多少重なり合う教会の七つの時代に関連していると見るからです。もちろんこの議論の有効性は、ひとつの状況が他の状況にいかにか二重の適用を持っているかというミドラッシュ的聖書解釈にかかってくる。しかしながら聖書に何かを読み込むような議論(帰納的ではなく演繹的な結論)を行ってはなりません。黙示録 4 章 1 節で「その後」と書かれ、ヨハネの姿が変わり天の幻を見た箇所が、七つの教会の次に来る箇所だと聖書から見て分かります。またこの七つの教会は黙示録 1 章 19 節と 4 章 1 節の間に置かれています。その冒頭でイエスはヨハネへの七つの短い手紙の導入部分として、「これらのことは今あり、後に起こる事だ」と語っています。それゆえ七つの教会は特定の時代に存在した文字通りの教会ではあるが、同時に黙示録 4 章 2 節から始まるヨハネへの啓示の箇所の前に、未来の意味をも持ち合わせていたことが分かります。

それゆえそれぞれの教会を吟味するにあたって、まず第一世紀の終わり、ローマの属州アジアに実際に存在した教会の歴史的な説明から始め、その後、七つの教会の性質をもって現れる「後に起こる」未来の教会時代について見ていきたいと思えます。

● 付け加えても減らしてもならない

すべての教理的な間違いが聖書に何かを付け加えるか、そこから減らすことをします。どちらの方法であれ主イエスの真理を取り去ってしまっています。以下の 8 つの聖書箇所に見られる一貫したテーマを考えてみてください。

『今、イスラエルよ。あなたがたが行なうように私の教えるおきてと定めとを聞きなさい。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたの父祖の神、主が、あなたがたに与えようとしておられる地を所有することができる。私があなたがたに命じることばに、つけ加えてはならない。また、減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を、守らなければならない。』(申命記 4 章 1 節-2 節)

『これらのことばを、主はあの山で、火と雲と暗やみの中から、あなたがたの全集会に、大きな声で告げられた。このほかのことは言われなかった。主はそれを二

枚の石の板に書いて、私に授けられた。』(申命記 5 章 22 節)

『あなたがたは、私があるあなたがたに命じるすべてのことを、守り行なわなければならない。これにつけ加えてはならない。減らしてはならない。』(申命記 12 章 32 節)

『主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。』(2 サムエル 22 章 3 節、詩編 12 編 6 節、18 編 30 節、箴言 30 章 5 節参照)

『神のことばにつけ足しをしてはならない。神が、あなたを責めないように、あなたがまやかし者とされないように。』(箴言 30 章 6 節)

『知恵ある者のことばは突き棒のようなもの、編集されたものはよく打ちつけられた釘のようなものである。これらはひとりの羊飼いにによって与えられた。わが子よ。これ以外のことにも注意せよ(他の訳「これ以外のことには注意せよ」...NASB,NIV,ESV,RSV など)。多くの本を作ることには、限りがない。多くのものに熱中すると、からだが疲れる。』(伝道者 12 章 11 節-12 節)

『さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言って来ました。それは、あなたがたが、私たちの例によって、「書かれていることを越えない」ことを学ぶため...』(1 コリント 4 章 6 節)

『私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。』(黙示録 22 章 18 節-19 節)

● 終わりの日の預言に関する典型的な解釈法

黙示録を解釈し、聖書的終末論つまり終わりの日を正しく研究するアプローチには 4 つの主要な方法があります。次に見ていく方法はそれぞれが正しく、それぞれが必ずしも相互排他的ではありません。問題となるのはひとつの方法が排他的に採用され、他の方法がその結果否定されてしまうことです。

最初のものは「過去主義」と呼ばれ、リベラルの学者たちに大いに好かれているものです。

彼らは聖書が主に道徳的原則を教えるために書かれたと考えます。それゆえ終わりの日に
関しての箇所がすでに実現したと主張します。彼らは書かれている出来事がこれから起こ
るような未来形で聖書に記されてあるのを認めますが、それは破格の表現であり、出来事
が起こった後に前もって予告されたかのように書かれてあるのだと主張します。

信じられないかもしれませんが、これは完全に間違っているわけではありません。思い出
してください。ユダヤ的な預言はパターンです。聖書の箇所は他の箇所を解釈しています。
それらはすべて組み合わせられる必要があるのです。黙示録 13 章では反キリストとその像が
描かれています。アンティオコス・エピファネスはこの預言を紀元前 168 年、神殿の祭壇
の上で豚をほふった時に部分的に成就しました。またユダ・マカベアがその敵を偉大な勝
利をもって破ったこともその成就の一部です。この出来事は今日までハヌカの祭り（奉獻）
という冬のキスレブの月 25 日の祭りで祝われ、イエスもヨハネ 10 章 22 節で祝われていた
祭りで記念されています。しかしマタイ 24 章でイエスはそれが再び将来に起こると言われ
ました。それゆえ過去主義は間違いではありません。イエスは再び何が起こるかを説明す
るために、すでに起こったことを話していたのです。間違っているのはリベラルがそれを
用いて行っている事柄の方です。

リベラル高等批評の過去主義的な終末論へのアプローチよりさらにおかしなことは、特
定のカルヴァン主義者の中にある再建主義的改革派の立場を取る自称福音派の過去主義と、
超カリスマ派の中にある支配主義神学 (*Dominion Theology*) です。これらの意見を持つ人
が主張するのは、オリーブ山の訓戒（マタイ 24 章 25 節、ルカ 21 章、マルコ 13 章）が黙
示録の預言と共に紀元 70 年に完全に成就したというものです。しかしこの見解は文脈とイ
エスの率直な教えによって退けられます。それは紀元 70 年にキリストがタラントで何を行
ったかに基づいて人々に永遠の報酬を与えなかっただけでなく、大患難のように激しい苦
しみは再び起こることがないと明らかにされたからです。衝撃的な紀元 70 年の出来事が大
患難また「ヤコブの苦しみの時」を預言的に予兆していたにしても、その出来事は来るべ
き大患難にはなり得ませんでした。なぜならそれより後代の歴史の中でイスラエルとユダ
ヤ人、また教会に対してより悲惨な虐殺事件が起こったからです。それゆえこの種の過去
主義を支持することは明白な愚かさであり、聖書記述と歴史記録の両方に矛盾していま
す。

二つ目が「**歴史主義**」と呼ばれるものです。このアプローチは終わりの時代の預言が未来
のことを指すと考えますが、初代教会の時代に完全に成就してしまったと主張します。ル
ターは（ヤコブの手紙と共に）黙示録を破棄しました。カルヴァンとツヴィングリは歴史
主義を信じていました。それゆえ皇帝が自身への崇拜を要求した時、反キリストの成就だ
と見なされました。皇帝コンスタンティヌスがコンスタンティノーブルに移り、当時の教

皇が反キリストとして皇帝の地位に就いたとき、改革者はこれと同じように考えたのです。

歴史主義もまた間違いでないとも重要です。終わりの日の預言はすべて初代教会で**部分的な**成就を見ました。イエスは紀元 70 年にすぐさま起こるべき出来事と同じ次元で、終わりの日の出来事について語られました。イエスは『エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら...逃げなさい』（ルカ 21 章 20 節-22 節）と言われました。何らかの形でこの事が再び起こりますが、この出来事は**文字通り**紀元 70 年に成就しました。ユダヤ的な思考法にとって預言は複数成就するものであり—最終的・究極的な成就に至るまでの一連の部分的な成就の集まりなのです。

歴史主義は明らかな問題を抱えています。そのひとつは初代教会にすべて予告されたことが実現しなかったということです。イエスはその時代にすべての統治権を握り、地上に御国を設立しませんでした。黙示録 1 章 13 節には特別な祝福が記されています。『この預言のことばを朗読する者（ギリシア語では継続形）...は幸いである（継続）』もしすべてのことが当時すでに成就してしまっていたなら今祝福は無いのです！黙示録は全歴史を通しての祝福の書です。ですが預言が、最終的・究極的な成就に至るまでの部分的な成就のパターンだと定義する限り歴史主義は真実です。

そして次に「**激励主義**」というものがあり、この単語は「戦い」や「論争」を意味するギリシア語から来ています。このアプローチは歴史の各時代、特に迫害の時代にクリスチャンを励ますために預言が書かれたと主張します。そうです。この見方も完全に有効です。問題なのはこの読み方が全てとしてしまい他の読み方を排除してしまう時です。

最後に「**未来主義**」です。未来主義者は終わりの日の預言**すべて**が未来に成就すべきものであり、預言が**唯一**未来についてのことだけだと言います。この見解によると、黙示録は終わりの時代が来るまで全く意味を成しません。このアプローチの問題点は七つの教会が第一世紀に存在し、後に 500 年間も存続した事実にあります。実際は、**いつの時でも**黙示録を読む**いかなる**信者に祝福があるのであって、**ただ完全に**未来に関することだけではありません。終わりの日の預言が初代教会で大幅に成就したことを見るとき、それは最終的な成就がどうなるかを教えているのです。

これらが終わりの日の預言を解釈する 4 つの方法です。西洋的な思考ではこれらのうちどれかひとつだけが真実であり、他のアプローチを無効としてしまいます。ユダヤ的な聖書観はこの 4 つのアプローチが同時に真実であり、相互に補完し合っていると考えます。

● イエスの警告

『イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。...また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。...にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。』(マタイ 24 章 3 節-5 節、11 節、24 節-25 節)

山上の説教でイエスは警告されました

『にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。』(マタイ 7 章 15 節)

「羊のなりをして」——にせ預言者たちはクリスチャンに似ているのです！もしそうでなかったら騙すことができないでしょう。人が迷うには一連の道しるべの中にひとつ間違っただけのものがあればそれで十分です。

熟練し、専門的で、給料を受けている説教者が最も聖書に詳しいと考えるのは非常に容易なことです。しかし聖書は「すべてのことを見分け」なさいと書いています。イエスが言われたことにいつも注意しててください。「にせ預言者に気を付けなさい...人に惑わされないように」

第一章

黙示録の七つの教会 エペソ

エペソ：『継続しない』 — 第1世紀



『エペソにある教会の御使いに書き送れ。

右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。

「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」』(黙示録2章1節-7節)

● エペソの時代

エペソの教会への手紙は、第一世紀の終盤にかけての使徒たち、またはエペソの教会の時代に触れているという点で、他の6つの教会とは違うものです。それゆえエペソに関して、預言の観点から第一義的に将来への適用はありません。とはいえ、キリストが称賛し戒めた原則はいつの時代の教会にも当てはまります。エペソの本来の時間枠は、ヨハネの幻があった頃の教会時代です。（著者は黙示録作者をヨハネとする伝統的な見解に立っています——しかしこの立場を取る理由を説明するのはこの本の範疇を超えています）

● 偉大な都市、エペソ

今日エペソは人気の観光地となっているイスラム教徒の町セルチュク（*Selsuk*）です。伝統によると、そこはヨハネがパトモス島から帰還した後に埋葬された場所といわれており、米福音派考古学者たちがヨハネの墓だと主張する場所に立つこともできます。エペソは七つの金の燭台の間に、他の教会には無い特別な燭台を持っていました（エペソ 2 章 5 節）。彼らは使徒たちと関係していたという点、またそのユダヤ的ルーツと、聖書を本来のユダヤ的な観点から理解できるという特権のために、他の教会が見ることのできないものを見ることができました。しかしその燭台は後に取り除かれました。

今日、エペソ（セルチュクの村）を訪れると、新生したクリスチャンはいうまでもなく、名ばかりのクリスチャンでさえ見つける事が困難です。旅行者はパウロの奉仕の際に暴動が起きたアルテミスの神殿跡（使徒 19 章 23 節–41 節）を訪れることができます。そこには「マリアの家」と呼ばれる場所があり、ギリシア正教会の伝統によるとそこでマリアが使徒ヨハネと共に隠居生活を送ったといわれています。一人 20 ユーロでツアーに参加できます。しかしながら、その場所がペテロやパウロ、バルナバ、ヨハネ、後にポリュカルポスなど——教会の柱すべてに関わったのにもかかわらず、現代どのような形のキリスト教も完全に存在しません。このような末路に至ったのは驚くべきことです。多くの神の真理と歴史の中心であった場所が、突如何も無くなってしまったのです。

ヨハネは紀元 96 年頃に黙示録を書きました。当時、エペソはアジアにおいて最大の港町でした。ペルガモがアジア州において首都であったにも関わらず、エペソは人口 25 万人を抱える、大きな都市でした。エペソは帝国中でローマ、アレキサンドリア、アンテオケに次ぐ第四の都市とみなされていました。コロサイやラオデキヤ、ガラテヤからの道がサルデスを通してエペソで地中海へと至りました。エペソはローマへの幹線道路にあったのです。またエペソは優美な建造物と、素晴らしい道とを誇り、約 21 メートルの幅がある並木道が港へと続いていました。

エペソは2万5千人収容可能な劇場とアルテミスで知られ、古代世界での七不思議と評されたダイアナ神殿を有していました。それは全体が大理石で造られ、ギリシア世界全体で最大の建造物でした。127本の柱のうち36本それぞれが18メートルの金箔で覆われ、当時の人々にとってとても豪華で偉大な印象を与えたことでしょう。その中央に位置していたアルテミスの像は小さく、黒く、多くの乳房が付いた像であり、発掘された像のひとつがバチカン美術館で展示されています。それはキリストの母であるマリア像と驚くべき類似性を示しています。実際、第五世紀のエペソ公会議にてマリアは「天の女王」「神の母」と宣言されました。それはエペソの異教的なダイアナ崇拝を真似たものですがギリシア語の「セオトコス (*Theotikos*) —神の母」という言葉は新約聖書のどこにも発見できません。アルテミスがエペソ人にとっていかに重要であったかを見るには使徒19章を読むだけで十分です。

使徒たちの教会と非常に密接に関係していたこの都市が、後代キリスト教の異教化の礎となりました。キリスト教の主流は異教化し、政治的なキリスト教界へと変革していきました。そこにはまた皇帝クラウディウス、ネロ、ドミティアヌスの神殿があり、後には神々の支配者ゼウスとして描かれた、実寸の4倍もあるドミティアヌス帝の像が祀られていました。現在、巨大な前腕が博物館に保存してあります。

後代のクリスチャンたちがアジアから連れて来られ、ローマの闘技場でライオンの前に投げ入れられたとき、実際に殉教したアンテオケの三代目主教イグナティオス（紀元35—110）はエペソのことを「殉教者の幹線道路」と呼びました。

● ドミティアヌス帝の時代

プリニウス（紀元61—113）はドミティアヌスが自らを「ドミノス・エト・デウス・ノステル—つまり『我らの主であり、我らの神』と表現する慣習に不満を述べていました。詩人のスタティウス (*Statius*) はドミティアヌスを、聖書がイエスに用いる「明けの明星」と呼びました。ルシファーもその明けの明星になろうとしたため、キリスト教徒への悲惨な迫害をもたらしたドミティアヌスは悪魔の性格を表した、反キリストの象徴と見られていました。注目すべきことに、ヨハネはあたかもドミティアヌスの主張を訂正するかのようになり、『私の主、私の神』（ヨハネ20章28節）とトマスがイエスを称賛したことを自身の福音書に記録しています。さらに彼の記した黙示録におけるイエス最後の言葉は、『わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である』（黙示録22章16節）なのです。

第一世紀には多くの終わりのしるしがありました。ヤコブが殉教したとき、シメオンと

いう人がエルサレム教会の主任牧師となりました。シメオンはイエスが言われたことを思い起こし、エルサレムの信者をペラと呼ばれる所へ導きました（ヨセフスの『ユダヤ戦記』を参照）。そうして現地の信者すべては救い出されました。それは彼らが終わりのしるしの成就を見た時、ローマ軍の一時的な退却を利用しエルサレムから逃げたからです。しかし紀元70年のティトスによるエルサレム包囲まで残ったユダヤ人たちは激しい苦難を経験し、自分たちの赤子さえ食べるようになり、申命記28章の恐ろしい警告を実現しました。同じ事は以前エルサレムがネブカドネザルに包囲された時に実現しました（エズラ5章10節）。これもまたアルマゲドン以前に何が起こるかを描き出しています。

● 迫害

皇帝は一年に一度の『主の日』（黙示録1章10節）に崇拝されることを要求しました。多くのクリスチャンが偽りの神の前にひざまずくのを拒み、ペテロとパウロは殺され、ローマは焼かれました。これは黙示録11章での二人の殉教者を予兆するもので、ギリシア語で殉教者とは『証人』と同じ意味の言葉です。これら実際に起こった出来事が終わりの時代に再現されます。このような事柄は来るべき最終的な成就の影なのです。

異教崇拝の中心地としてのエペソは、終わりの日の迫害をこと鮮明に象徴するものです。アゴラ（市場）へと続く遊歩道は、頭上にカエサルを神の子として称える碑文が飾られていました。それゆえ売り買いするためには皇帝の神性を事実上認めなくてはなりません。それを拒んだクリスチャンたちは町の商業生活から排除され、売ることも買うこともできなくなりました。さらに彼らは遊歩道の両側にある柱に縛り付けられて、市場へと至る人間の街灯として道を照らすため火を付けられました。これが反キリストの行うことの前兆であり、商業を営む能力がその神性を暗黙に認めることと関係づけられるのです。

さまざまな教派が設立される以前、教会間には迫害によってもたらされたある程度の一致がありました。終わりの日にも同じようになります。初代教会において終わりの日の教えが繰り返されていました。「いつ主が戻って来られるのか」というのが共通の関心事であり、イエスが再臨しなかった時、人々は落胆していました。それゆえイエスは御使いを通して現れ、次のように言われたのです。

『勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には...』（黙示録2章26節）

『聖なる、真実な主よ。いつまで...ですか』（黙示録6章10節）

『あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺される

はずの人々の数が満ちるまで』(黙示録 6 章 11 節)

これは考えるのも恐ろしいことですが、初代教会に激しい迫害があったように終わりの日にも再び同じことが起こります。現代の中国や北朝鮮で新生したクリスチャンに起こっていることを見てください。皇帝ネロのもとにあったローマは—自国民であった—クリスチャンたちを焼き殺しました。そして 16 世紀にローマ教会は自分たちの教会員が聖書を読んでいたことにより人々を焼き殺したのです。終わりの日は、実に聖徒に忍耐が要求される時代となります(黙示録 13 章 10 節)。

● 大祭司としてのイエス

『イエス・キリストの黙示。これは、...神がキリストにお与えになったものである』(黙示録 1 章 1 節)

神はイエスに黙示を与えられました

『そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。』(黙示録 1 章 12 節-16 節)

イエスが出エジプト 29 章のユダヤ的な大祭司に取って代わったように、新しい大祭司として着飾っていることに注目しましょう。大祭司は血によって聖められ、特別な衣を着ていました。そしてその祝福と召しは子孫に受け継がれました。今イエスこそがその大祭司です。そしてアロンの息子たちがアロンの奉仕を行っていたように、イエスに従うすべての者が大祭司であるイエスの奉仕を行うべきなのです。

いけにえを捧げ、民のためにとりなしをすることが祭司たちの務めでした。第一ペテロ 2 章 9 節にあるように、**すべての**信者が祭司です。祭司でないクリスチャンというものはあり得ません。誰でも祭司でないならクリスチャンでもなく奉仕者でもありません。誰でもクリスチャンである者は祭司であり、奉仕者なのです(奉仕者とは『しもべ』という意味)。新しい契約の下で任命される『祭司』という考えは完全に人の教えです。それゆえ、女性『主教 (*priest*)』に関する議論は完全にくだらないものです。どうしてそもそも始

めから論理性に欠き、何の根拠も無いことのために組織全体が分裂するようなことがあり得るのでしょうか。

『それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。』(黙示録 1 章 13 節)

ともあれ、黙示録 1 章に登場するイエスの服装は大祭司の衣を表しています。大祭司は一種の胸当てを肩に掛け、脱いではならない長服を着ていました。長服は救いの衣を象徴します。モルモン教徒たちは決して脱がない一種の下着を着用し、教皇は一種の前掛けやベストのようなスカブラリオというものを着ます。おかしく聞こえるかもしれませんが、彼らはここからそのアイデアを得たのです。それに加えて、アロンは十二部族を象徴する十二の記章を載せた胸当てをその胸に着けました。

祭司が誰かの虫歯のような小さな事柄のために祈ると、祈りが唱えられ、それで仕事は完了しましたが、とりなしの重荷を表す胸当てを大祭司は夜昼取り外してはならず、戦いに勝つまで着用する必要がありました。ある人がとりなしの人であるとしたなら、その心にある重荷は祈りが聞かれ、戦いに勝利するまでそこに残ります。それが現在イエスさまがなさっていることです。イエスさまはイスラエルの重荷を負い、新約の大祭司として十字架にかけられ、イスラエルに繋がれた者たちの重荷を負っているのです。

すべての信者が神によって一定の信仰を与えられており、「信仰がなくては、神に喜ばれることはでき」ません(ヘブル 11 章 6 節)。しかしすべての者が信仰の賜物を持っているわけではありません。特別な信仰の賜物が存在します(1 コリント 12 章 9 節)。そしてとりなす人はこの神からの賜物を持ち、イエスがそうであったように特定の事柄に対して重荷を負います。しかしすべての信者はある意味でイスラエルだけではなく、ひいては教会、また失われた人たちのために肩と胸に重荷を負うべきなのです。

● 聖霊に倒される

『それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、』(黙示録 1 章 17 節)

これをゼカリヤ 4 章と対比すると

『私と話していた御使いが戻って来て、私を呼びさましたので、私は眠りからさ

まされた人のようであった。』（ゼカリヤ 4 章 1 節）

『聖霊に倒される』という現象は新約旧約両方で何度も起こっています。彼らは神の臨在にあって倒れました。一方、その用語自体は黙示録 1 章 17 節でヨハネが「足もとに倒れて死者のようになった」と語った箇所から来ています。同じことがダニエル 10 章でダニエルに起こりました。

ジョージ・ホウィットフィールドはジョン・ウェスレーの集会で人々が『聖霊に倒された』のを見た時非常に困惑しました。しかし数日後に同じことが彼自身の集会でも起こったのです。確かに今日なされている人を押し倒したり、催眠術や巧みな話者によってなされる感情の扇動などの多くの行為はただの無意味なことです。当然偽物は作られ得ますが、本来は聖書的なものなのです——聖霊に倒されることは実際に起こります。

『彼は私に言った。「あなたは何を見ているのか。」そこで私は答えた。「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついています。また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本はその左にあります。」さらに私は、私と話していた御使いにこう言った。「主よ。これらは何ですか。」私と話していた御使いが答えて言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。大いなる山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。彼は、『恵みあれ。これに恵みあれ。』と叫びながら、かしら石を運び出そう。」

ついで私に次のような主のことばがあった。「ゼルバベルの手が、この宮の礎を据えた。彼の手が、それを完成する。このとき、あなたは、万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。だれが、その日を小さな事としてさげすんだのか。これらは、ゼルバベルの手にある下げ振りを見て喜ぼう。これらの七つは、全地を巡る主の目である。」

私はまた、彼に尋ねて言った。「燭台の右左にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」私は再び尋ねて言った。「二本の金の管によって油をそそぎ出すこのオリーブの二本の枝は何ですか。」すると彼は、私にこう言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。』

何らかの方法で物質的な神殿の構造は天についての真実を反映し、教会についてもある

特定の真理を反映しています。これが黙示録がまとめ上げているもので、ゼカリヤ 4 章を反映しています。黙示録の七つの燭台は七つの教会であり、二人の油注がれた者が黙示録 11 章でも再び登場しています。ある人はそれが肉体的に死んだモーセと、神によって上げられたエリヤを示していると言い、ある人はモーセとエノク、エノクが天へ歩んで行ったことからそう言います。

黙示録 1 章 13 節に「人の子」という表現が登場するのは興味深いことです。その言葉が旧約聖書で登場する時はいつでもイエスについて教えている個所です。ダニエルとエゼキエルはイエスの象徴です。エゼキエルは主要なイエスの象徴です。そしてダニエル 10 章 9 節では『私は意識を失って、うつぶせに地に倒れた』とあります。ダニエルもまた死者のように倒れたのです。

パウロは書いています

『無益なことですが、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう。私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。——第三の天にまで引き上げられました。私はこの人が、——それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです。——パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。たとい私が誇りたいと思ったとしても、愚か者にはなりません。真実のことを話すのだからです。しかし、誇ることは控えましょう。私について見ることに、私から聞くこと以上に、人が私を過大に評価するといけないからです。また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。』(2 コリント 12 章 1 節-7 節)

パウロは明らかに自分自身のことを語っており、それはおそらく『パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した』時であったことでしょう(使徒 14 章 19 節)。それは一種の携挙でした。パウロは何らかの形で天にまで引き上げられました。それはゼカリヤやエリヤ、エゼキエル、またエノクにも起こりました。それぞれすべての箇所が来るべきことについて教えています。『主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の

中に一挙に引き上げられ【ラテン語では『ラプトゥロ (rapturo)』であり、そのため英欽定訳で『ラプチャー (rapture)』という言葉が使われている】、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。』（1テサロニケ 4章 16節－17節）

イエスの御姿が山で変わったとき（マタイ 17章）、突然そこに一度も死ななかつたエリヤと、亡くなったが墓が見つからなかつたモーセが現れました。しかし彼らみなが同じ輝き、白い光を放っていました。信者は死んでも死ななくても、みなが同じような姿をもって現れます。信者が死んだ後には何が起こるのでしょうか。それは黙示録が説明している大きな問題です。何らかの形で数世紀の間『眠った』後、信者はみな主と永遠にいるために引き上げられます。パウロやヨハネのような人たちはそれらのことを前もって垣間見ていました——それは『口に出すことのできないことば』（2コリント 12章 4節）という箇所などです。

● 新しい体を受ける忠実な証人

次に忠実な証人についての概念が登場します

『また、**忠実な証人**、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、』（黙示録 1章 5節）

イエスは忠実な証人として描かれています。一方詩篇では、

『彼の子孫はとこしえまでも続き、彼の王座は、
太陽のようにわたしの前にあろう。
それは月のようにとこしえに、堅く立てられる。
雲の中の**証人は真実**である。』セラ
しかし、あなたは拒んでお捨てになりました。
あなたによって油そそがれた者に向かって、あなたは激しく怒っておられます。』（詩篇 89篇 36節－38節）

この個所のように、黙示録ではイエスは人に拒まれたが、永遠に生きておられる忠実な証人だと描かれています。黙示録での天にある御座を見ると、神が物質的な事柄を説明するために、天的な事柄または霊的な事柄を用いている方法が分かります。

『その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。』（黙示録 1 章 15 節）

しんちゅう（青銅）がさばきと関連していることに注目してください

『ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。』（2 コリント 5 章 16 節）

パウロはヨハネの語ったことを話しています。彼らはイエスを栄光を受けた形で知っていました。ヨハネは他のどの弟子たちよりもイエスを良く知り、最後の晩餐において頭をイエスにより掛けた弟子です。しかしヨハネが栄光を受けたイエスを見た時、イエスは幼虫と蝶ほど異なっていました。『まゆ』（墓）の中で死によっていのちのクライマックスを迎えた幼虫は変化を経験し、美しく新しい創造を生み出すのです。信者はイエスの例に従うよう定められています。いつの日かすべての信者は幼虫からよみがえった蝶のように美しくなります。信者が天に上げられ、鏡で自分の姿を見ても自分だとは分からないことでしょう。

● 救い、救われ、新生すること

救いには三つの側面があります

- 私は**過去**に救われた
- 私は**今**救われ続けている
- 私は**将来**に救われる

同じように、

- 私は**過去**に新生した
- 私は**今**新生し続けている
- 私は**将来**に新生する

救いの過去の側面は『義化』と呼ばれます。すべての人は盗みや、嘘を付くことなどによって罪を犯しました。しかし義とされ——救われたのです。それはイエスが罪の代価を払い、人が悔い改め、イエスに感謝し、そのような事柄から離れたからです。

しかし現在のところ、信者たちは**まだ**救われ続けている状態であり、まだ聖なるものと**され**続けています。これは継続的で毎日のことです。

『イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』(ルカ 9 章 23 節)

『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によって生きているのです。』(ガラテヤ 2 章 20 節)

人生のすべての日々に信者は**今もなお**救われ続けています。救いの現在の側面は「聖化」です。

そして**将来**信者は救われます。

『しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。』(マタイ 24 章 13 節)

これが贖いです。それは世の終わり、将来に来るべきものです。

『これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上へ上げなさい。贖いが近づいたのです。』(ルカ 21 章 28 節)

以前に触れた創世記、ヨハネの福音書、黙示録のつながりと、園といのちの木が繰り返して登場していることに目を向けましょう。このためいのちの木は(黙示録中の)エペソへの手紙にも現れています。

『勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。』(黙示録 2 章 7 節後半)

エデンの園で失ったものは返ってきます。ここには三つの並行したテーマがあります。

1. 創造——創世記での創造
2. 新しい創造——福音、現在キリストのうちに**ある**新しいいのち

3. 再創造——黙示録に記され、将来起こること

この三つが成立します。このため聖書全体では同じ絵、同じ象徴、同じ言葉が繰り返されています。たとえば黙示録 6 章 8 節では何が書いてあるでしょう？ 祭壇の下でみことばと自ら持つ証のために殺された殉教者たちが叫んでいます。祭壇の下には何があるでしょう？ 祭壇の下は血が地面へと流れ出す場所です。創世記では何が描かれているのでしょうか？ アベルの血が地面から叫んでいます。ヨハネではどうでしょうか？ イエスの血が地面へと流れ出ています。

また例を挙げると、神は創世記の創造において光とやみとを区別されました。神は新しい創造においても光とやみを分けに来られました。ヨハネ福音書でイエスはこの世の光として来たが、人はその行いが悪かったために暗やみを愛したとあります(ヨハネ 3 章 19 節)。悔い改めることのない罪人たちは暗やみを愛し、暗やみの中で多くの罪が隠されています。しかし神は暗やみの中さえ見通します。主は何でもご存知です。そして悔い改めた罪はすべて消し去られます。信者はいつも光の中を歩むことを学ぶ必要があるのです。

そして最終的に黙示録の再創造において、小羊が光であり、主の栄光が光となります(黙示録 21 章 23 節)。

● イエスがエペソに語ったこと

このエペソへの手紙の中で特に注目すべき三つの事柄があります

- 第一——偽りの使徒
- 第二——初めの愛を失ったこと
- 第三——ニコライ派の行い

イエスは黙示録の 1 章で、ヨハネの見た神聖化した姿の様々な側面をもって、それぞれの教会へ描かれています。『継続しない』という意味の名を持つエペソへイエスは、「七つの金の燭台の間を歩く方」として描かれています。そして黙示録 1 章 20 節で燭台は七つの教会であることが特定されています。それゆえイエスは何らかの形ですべての教会の間を歩かれています。これは大切なことです。なぜならエペソは初めの愛を失ってしまった教会だからです。彼らは、天は上にあり、地は下にあり天と離されている、それゆえ人はイエスと遠く離れているというギリシア的思考を受け入れてしまいました。エペソの教会は、イエスが今も燭台の間、教会の間を歩み続けておられることを思い起こす必要がありました。その姿が見えないとしてもイエスさまは今も信者と共にいるのです。

イエスはいつも手紙の冒頭を称賛で始めています。（パウロも自身の手紙で同じことをしています。私たちもその例に見習うべきです）

『わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。』（黙示録 2 章 2 節－3 節）

イエスは彼らの忠実さを指摘し、偽りの使徒をも我慢しなかったことを語っています。そのような者を試したことを、イエスさまがいかに**称賛**しているかに注目してください。

『というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。』（2 コリント 11 章 2 節）

真実の使徒は花嫁をきよく、傷が無く、清純な処女としてささげることが最大の目標とします。

『しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。』（2 コリント 11 章 3 節）

黙示録にはサタンの二つの形態である、蛇と竜が登場します。竜は教会を迫害し、蛇は教会を欺きます。パウロはここで欺きについて警告しています。

『というわけは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。私は自分をあの大使徒たちに少しでも劣っているとは思いません。たとい、話は巧みでないにしても、知識についてはそうではありません。私たちは、すべての点で、いろいろな場合に、そのことをあなたがたに示して来ました。』（2 コリント 11 章 4 節－6 節）

パウロは「異なった福音が宣べ伝えられた時」と語っています。しかし『異なった』福

音とは一体何なのでしょう？ 異なった福音は大体正しく見えることに注意してください。そしてひと目見ただけでは正しく見えてしまう場合もあります。そうでなければ欺きではないからです。しかし異なった福音というのはいつも、すべてのキリスト教真理が基づくべき本質的な真理を歪曲します。

- キリストの十字架
- キリストの復活
- キリストの再臨

キリストが死なれ、よみがえり、もう一度戻って来られること、これが本質的な真理です。すべて他の真理はこの真理を基礎としなければなりません。イエスがその真理です。私たちに

- 十字架の真理
- 空になった墓の真理
- 後に戻って来られるオリーブ山についての真理

このような真理があります。

すべて他の真理はこの三重の真理に基づく必要があります。もし誰かが他の真理、たとえそれが真理のひとつであってもそれを中心的なものとするれば、それはこの三重の中心的真理、キリストが十字架に架けられ、よみがえり、また再臨されるということ歪めるものとなってしまいます。その行為はただ真理を歪めるだけでなく、真理を不明瞭にします。そして不明瞭にされたものは教えの全体像から締め出されてしまうのです。

偽りの信仰と繁栄の福音を提唱する者たちは真理のひとつを持っています。しかしその真理は主要な真理の理解をもって見たときのみ有効なものです。その主要な教理に当たるのが十字架とよみがえり、イエスの約束された再臨です。間違った信仰と繁栄の福音を強調する人たちは、十字架に付けられた生活を強調しません。彼らは人生を主に明け渡すことなく、それと反対に何百万ドルを自分のために用いているのです！それゆえ中心的な真理が他の真理によって置き換えられ、代替の真理はひとつの嘘にまで歪曲されてしまっているのです。

ある人はイスラエルとユダヤ人に対する、終わりの時代における神の目的という真理のひとつを信じ、イエスではなくイスラエルを中心的な真理へとしています。そうすると何が起こるのでしょうか？ 十字架のメッセージが不明瞭になるのです。ある団体はユダヤ人をイスラエルに帰還させ、彼らを愛し、最善の方法で彼らを祝福していますが、改宗は勸

めないという約束を交わしました。ペテロやヨハネ、パウロがそのような約束をすると想像できるでしょうか？

● 偽りの使徒

『しかし、私は、今していることを今後も、し続けるつもりです。それは、私たちと同じように誇るところがあるとみなされる機会をねらっている者たちから、その機会を断ち切ってしまうためです。』(2 コリント 11 章 12 節)

言い換えると、これは使徒として認められたがる人たちのことです。イエスはエペソに耳がある者は聞けと語っています。『わたしは...使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている』(黙示録 2 章 2 節)

パウロは続けます

『こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。』(2 コリント 11 章 13 節-15 節)

パウロはこれをどのような文脈で語っていたのでしょうか。『異なった福音』という文脈においてです。彼らはその目をイエスから逸らし、十字架、中心的なメッセージから逸れ、偽りに陥りました。すべての偽りの使徒が何らかの方法でこの失敗を犯します。彼らはキリストの本質的真理である十字架とよみがえり、再臨から目を逸らし、その他の真理を強調し始め、中心的なものとしてしまうのです。これが偽りの使徒の辿る道です。

● 真実の使徒

新約聖書の中には少なくとも 4 種類の使徒が登場します。最初で最も重要な使徒がイエスご自身です。

『そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒(英語では *the Apostle*)であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。』(ヘブル 3 章 1 節)

イエスはヘブライ人への手紙で大祭司と呼ばれ、黙示録でも大祭司として認識され、そのように描かれています。しかしヘブライ人への手紙 3 章 1 節のギリシア語は定冠詞が付き——『**その特別な**』使徒だと言われています。他の使徒たちすべては使徒的權威をイエスから頂かなくてははいけません。『**その特別な**使徒であり、大祭司』であるお方からです。

一方で、その他 3 種類の使徒がいます。最初は本来の十二使徒です。イエスが 12 人を任命し、彼らを使徒に指名されました。

『夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。』（ルカ 6 章 13 節）

そしてパウロがいます。パウロは本来の 12 人の中にはいませんでした。パウロを待つ代わりに使徒たちは思い上がってマッテヤを選んでしまったとある人は教えていますが、それは間違いです。注意深く使徒 1 章 21 節を読んでみましょう。ユダが自殺したとき、使徒たちはイエスの奉仕が始まってから、またバプテスマのヨハネの頃からずっと共にいた人を選びました。他の使徒たちはバプテスマのヨハネの弟子たちであり、イエスの弟子となる前におそらくヨハネによってバプテスマを受けていたことでしょう。しかしパウロはそうではありませんでした。

それゆえ、イエスが『**その特別な**』使徒であり、その後 12 人、そしてほぼ独特なケースとしてのパウロ、最後にアポロやバルナバのような人物がいました。バルナバは使徒 14 章 14 節で使徒と呼ばれています。『使徒』という言葉は単に『持ち場から離れて』または『遣わされた者』を意味します。今日、唯一存在する種類の使徒は、母教会から遣わされて教会開拓を行う宣教師たちです。

教会開拓を行う宣教師のモデルは聖書のどこに見受けられるでしょう。使徒 13 章で、パウロは自分が使徒であることを知っていました。神がダマスコでアナニヤを通して語ったからです。『あの方はわたしの名を、異邦人...の前に運ぶ、わたしの選びの器です』（使徒 9 章 15 節）パウロは異邦人への使徒として召されました。ですがそれから 17 年間経過し聖霊に導かれた教会に承認されるまで、使徒としての奉仕を開始しませんでした。教会はその承認を行った後に初めてパウロを**派遣した**のです。

今日、自分を使徒だと名乗っている者たち（「神がこう語られた」というタイプの人たち）は使徒 13 章から見習うべきです。パウロは教会によって承認されるまで、またバルナバと共に**遣わされる**まで使徒として出て行きませんでした。神はパウロだけを遣わしたでしょうか？ いいえ、違います。聖霊は「バルナバとサウロをわたしのために聖別しなさい」

と言われました（使徒 13 章 2 節）。新約聖書の基本的な模範は指導者の複数制です。教会開拓を行う宣教師であっても、パウロは教会とつながり、教会に従っていました。

今日、自分のことを使徒と称している者たちの幾人かは、独りよがりの独裁者たちです。その人たちは始めは正しかったかもしれませんが、プライドに飲み込まれてしまいました。とても多くの教会が『誰々の』教会として名を馳せていますが、これは聖書的ではありません。そのような人たちは誰の権威にも従っていないのです。パウロはいつもアンテオケに報告をしていました。使徒 15 章で教理の問題が出たときは、長老とその他の使徒たちの共同の権威に従っていました。そしてパウロはいつもバルナバやルカを連れていました。それがパウロの使徒の形です。現代には多くの教会開拓の宣教師や奉仕者たちがいますが、もし彼らが正当な者なら、聖書的であるはずですが。

それゆえ自分自身を『使徒』と呼ぶ者に出会ったなら、その人たちが本当の使徒かを試すことが聖書的な対応です。イエスがエペソの教会を褒めたのは、彼らがそのような人たちを試したからです。

● 初めの愛を失う

イエスがエペソに語られた二つ目の事柄は、初めの愛を失ってしまったことについてです。これは現実に起こり得ます。誰かが『救われた』時、新しい信者の周りにはいる人たちはその人のことを狂っていると考えます。ある信者の場合は、麻薬で逮捕され、軍隊の召集令状を燃やし、私立学校から退学にされても父親から怒られませんでした。人生をキリストのために明け渡したとき、父親に銃を突き付けられるようなことがありました！

救われた当初、ある信者は自分がパウロの次に有能だというようなことを考えます。救われたばかりの信者は不器用かもしれませんが、熱意があるのです。教会は年を重ねた羊の知恵によって運営されるべきですが、新生した子羊の熱意で動くべきです。

残念なことになまぬるい教会は、熱意のある新生したクリスチャンをよくなまぬるい信者へと変えてしまいます。なまぬるくなった人は初めの愛を失ってしまったのです。しかしずっと熱烈な初めの愛を持ち続けている人は、自分の中におられる聖霊の力や、純粋な喜び、熱意によって他の人を動かし、確信をもたらします。

第一世紀の使徒的教会はしばしば理想的な教会と評されます。それはある面では真実です。しかし当時の信者も問題を抱えていました。また彼らの直面していた問題は現代の教会と大きく違うものではありません。コリントには超カリスマ派の過激派たちがいて、テ

サロニケには終わりの日についておかしい考えを持つ人たち、ガラテヤには福音に戒律を付け加えようとする律法主義的なクリスチャンがいました——これがかつて起こっていたことであり、今現在も起こっていることです。日の下には新しいものは何ともありません。しかし彼らの問題はどのようにして始まったのでしょうか。すべての問題が同じ始まり方をします。例を挙げると結婚ではどんな問題が起こるでしょう？ 初めの愛を失ってしまうことです。

妻にイライラするとき、私はただ当時私を魅了していたこのイスラエル人の女の子と死海の海岸沿いを歩いていた光景を思い出します——この女の子を私はエルサレムの道でキリストの信仰告白へと導いたのです。私は彼女とガラリヤ湖畔を歩きながら、聖書の基本的な真理を説明していたことを思い出します。彼女こそ私が恋に落ち、心の中から今も愛している人なのです。みなさんが結婚しているなら、ご主人たち、あの時を思い出してただ彼女を愛してください。

自然の傾向として、人は初めの愛を忘れがちです。しかしすべての人がイエスとの初めの愛を思い出すべきです。イエスはそうするようにエペソの人に語られました。

真実のリバイバルが教会に来る時、みなの人がいのちに満たされ、神の聖さに畏れをなします。しかし時間が経ち、初めの愛が失われると次第に何が起こるでしょう。人がこの初めの愛を失った時に起こる二つの事柄があります

- 毎日の祈りの質と量が落ちる
- 伝道への熱意を失う

初めの愛を失った人たちはイエスが何をしてくださったかをみなに語りたという熱意を持っていません。彼らは言い訳をし「私は伝道師ではないから」と言います。しかしすべての人が伝道師でないにしても、すべての人が証人です。イエスは「あなたがたはわたしの証人となる」と宣言されました（使徒 1 章 8 節参照）。トラクトを配ったり、家を訪問したり、一対一で話して、人間関係を作れない人はいません。これはすべての人がトラクトを配り、家を訪問すべきだと言っているわけではありませんが、イエスさまはすべての信者に証人としての奉仕を持っておられるということなのです。イエスさまにみこころが何かを尋ねましょう。キリストの証人となるように召されていない信者はひとりもいません。

- **ニコライ派の行いを憎む**

『しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。』（黙示録 2 章 6 節）

最後に、イエスは事実、ご自身も嫌っておられたニコライ派の行いをエペソの教会が憎んでいたため彼らを**称賛**しました。聖書は大抵の場合、自ら解釈を導き出しています。『ニコ』と『レイティー（一般の人たち）』という言葉がつながると、『民の圧制』または『信者の支配者』を意味します。これは自分たちの兄弟を支配し、威張っていたレビ人の祭司のような聖職者階級を指します。

サタンは教会に異教的習慣を持ち込むことに成功する以前、教会をユダヤ教化しました。ガラテヤでは何が起こったでしょう？ 彼らはギリシア人改宗者に割礼を受けさせようとしました。ガラテヤ人たちはイエスの福音を教え、その後「あなたも割礼を受けなければならない」と教えたのです。これと同じように現代にも信者は土曜日に働いてはいけないというセブンスデイ・アドベンチスト信者たちがいます。

それゆえニコライ派の人々は、万人祭司の代わりに特別な祭司職を設け、支配層を作り出しました。これは部分的にグノーシス主義の影響からやって来ました。グノーシス主義とは特別に任命された人だけに与えられる、特別な知識または力が存在するという考えです。教会の中に指導者がいるのは事実です。長老がいて、使徒や預言者、伝道者、教師たちがいます。そして牧師がいて、たましいを見守る人たちがいます。彼らが活躍していることを神に感謝します。しかし特別な『祭司職』という考えはどうなのでしょう。そのような人は野放しにしておくべきでしょうか。特別な祭司職の下にいないと実際に救いが無いと言ってしまうのはどうなのでしょう。

人が何らかの使徒の權威や、他人の人生を支配する能力があると主張したならば、まずその人を試みましょう。彼らは聖書的な使徒的權威のパターンに当てはまるでしょうか。パウロやバルナバのように教会權威の下にいて、それにつながっているでしょうか。彼らはアンテオケに報告をし、他の使徒たちと会い、福音を確かめてもらうためエルサレムの長老と会合しているでしょうか。それとも彼らはニコライ派でしょうか。イエスは彼らの行いを憎みました。そうはっきりと語られたのです。

ニコライ派の祭司職や祭司に似たものが現れる時にはいつでも、人々は最後には除外され、靈的また精神的な傷を負います。アイルランドはすべての村に司祭がいますが、アイルランドこそ世界で最もアルコール依存症と統合失調症の発症率が高い場所です。しかしこれは新興の教会でも見られることです。「使徒的權威 (*apostolic authority*)」と呼ばれるものは——それが教皇か、厳しい重荷を負わす牧師からのものであれ——ニコライ派のし

るしである可能性があります。

● 結論

信者個々人の最大の願い、また祈りは、取るに足らない自分たちを始め、現代の教会が初めの愛に立ち返ることであるべきです。イエスを最初に知り、信じ始めた時のような方法でイエスを愛し続けているならば何の問題も起こりません。イエスさまはご自身を実際に愛する者を守られるのです。